

昭 和 三 年

同轉案改造工事	五	基	淺野セメント株式會社
配水塔並貯水槽	一	式	荒玉水道町村組合
ボギー電動客車	二	輛	小田原急行株式會社
二十五噸熔銑車	一	輛	製鐵部
佐久發電所水壓鐵管	一	式	關東水力電氣會社
佐久發電所餘水路鐵管	一	式	同
同 サージタンク並コラム	一	式	同
鋼製一萬噸重油槽	一	基	小倉石油株式會社
ユナツクス式同轉窯	二	基	淺野セメント株式會社
蒸溜釜及エヤーコンデンサー	三	棟	日本石油株式會社
松谷發電所鐵骨建物	一	式	群馬水電株式會社
第一號鐵構外四體	一	組	築城部本部
掩蓋	一	組	同
石油罐	三	罐	新潟鐵工所
船用汽罐	二	基	船渠部

昭 和 四 年

諸室雜作及防音防熱裝置	一	式	橫須賀海軍工廠
吸入鐵管及排泥管	一	式	東京市
衣囊棚	一	室	橫須賀海軍工廠
第一番艦諸室雜作工事	一	組	同
排泥管フローター	三	組	橫濱市港灣部
十一番艦諸室防音防熱裝置	一	式	橫須賀海軍工廠
フロート取付並フレーム製作	二	個	內務省橫濱土木出張所
鐵矢板鋪定艀外三種製作	二	點	內務省東京土木出張所
フローター	三	組	東京灣埋立株式會社
第一番艦諸室雜作工事	一	式	橫須賀海軍工廠
ケーソン改造方	一	個	同
ドライメン	一	式	神奈川コークス株式會社
揮發油配給槽附屬管共	二	基	海軍省
第六番艦第三回廠外工事	一	式	橫須賀海軍工廠
防熱作業施行方	一	式	同



煙路防熱作業施行方	一	式	同
隔壁加工方	二	廉	同
ガソリン裝備ニ伴フ風通裝置	四	廉	同
諸室雜作及改造施行方	一	廉	同
第七番艦第二回廠外工事	五	廉	同
第六番艦第十回廠外工事	二	廉	同
木甲板以下工作施行方	六	廉	同
諸室雜作以下施行方	一	三	同
鐵道省東京汽力發電所鐵骨製作並現場鉸接工事	一	式	株式會社大林組
掩蓋	二	組	陸軍築城部本部
鋼製一萬二千噸フロートチングルーフ付油槽	一	基	紐育スタンダード石油會社
揮發油槽	二	基	同
乾式回轉窯	一	基	淺野セメント株式會社
原料乾燥機	二	基	同
燒塊冷却機	一	基	同
池田式水管汽罐	六	罐	池田工業事務所
排泥管	六	本	東京灣埋立株式會社
スパツド	四	本	同
サクシヨンラダー	一	組	同
フローター	四	組	同
排泥管	一	本	横濱道省
三菱カルベ汽罐節炭器ホツパー	八	個	鐵道省
スパツド	四	本	臨海土木工業所
三十六噸横置式油槽	四	個	紐育スタンダード石油會社
釜石工場油槽並諸管裝置	一	式	ライデングサン石油會社
沼津工場油槽並諸管裝置	一	式	同
標的部分加工方	一	組	横須賀海軍工廠
十二噸積有蓋貨車	一	輛	鶴見臨港鐵道會社
七噸積有蓋緩急車	六	輛	南武鐵道株式會社
二十噸鑛滓運搬車	二	輛	製鐵部
二十噸無蓋貨車	三	輛	同
二十噸無蓋貨車	二	輛	同

煙路防熱作業施行方	一	式	同
隔壁加工方	二	廉	同
ガソリン裝備ニ伴フ風通裝置	四	廉	同
諸室雜作及改造施行方	一	廉	同
第七番艦第二回廠外工事	五	廉	同
第六番艦第十回廠外工事	二	廉	同
木甲板以下工作施行方	六	廉	同
諸室雜作以下施行方	一	三	同
鐵道省東京汽力發電所鐵骨製作並現場鉸接工事	一	式	株式會社大林組
掩蓋	二	組	陸軍築城部本部
鋼製一萬二千噸フロートチングルーフ付油槽	一	基	紐育スタンダード石油會社
揮發油槽	二	基	同
乾式回轉窯	一	基	淺野セメント株式會社
原料乾燥機	二	基	同
燒塊冷却機	一	基	同
池田式水管汽罐	六	罐	池田工業事務所



昭和五年

第六番艦前後部外板工事

鋼製七千噸重油槽	一	組	横須賀海軍工廠
三十四噸直立式油槽	一	基	陸軍築城部本部
三十噸横置式油槽	四	基	舞鶴要港部
原料乾燥機	一	基	紐育スタンダード石油會社
回轉窯用胴體	一	基	ライヂングサン石油會社
ランカシャー型汽罐	一	基	淺野セメント株式會社
船用汽罐	一	基	同
深川工場油槽製作並組立	二	基	東京地方專賣局
三噸スチツフレツグデリツク	二	基	名古屋港務所
カーゴ式グラブクレーン	一	基	紐育スタンダード石油會社
水抵抗器用鐵構	一	基	淺野セメント株式會社
スバツド	二	基	同
沈設用排泄鐵管	一	式	鐵道省
	二	本	東京灣埋立株式會社
	二	基	同

排泥管	三	本	同
フローター	一	組	同
排泥管	四	本	横濱市
スバツド	二	本	同
排泥管	三	本	東京市
鑄鐵製上下門扉外三點	一	式	同
接手鐵管及バンド	一	組	尼崎築港株式會社
鐵管フランヂ及鐵ジョイント内輪	二	組	東京灣埋立株式會社
トラツク用七〇〇ガロン油槽	三	基	紐育スタンダード石油會社
三十七噸横置式油槽	二	基	同
汽船南宮丸汽罐	一	基	札幌鐵道局
三十七噸横置式油槽	二	基	紐育スタンダード石油會社
一萬噸フローチングルーフ付油槽	二	基	同
船用筒形多管式汽罐	一	基	淺野セメント株式會社
鐵骨	一	組	陸軍築城部本部
排砂管及纜手バンド	三	組	内務省仙臺土木出張所



揮發油地下油槽 一 〇 基 紐育スタンダード石油會社  
 電解槽タンク 二 二 五 〇 個 株式會社日立製作所  
 極板ターミナル 二 二 五 〇 組 同  
 軌條及スリパー取付外三點 一 式 海軍技術研究所  
 三十四噸直立式油槽 二 基 紐育スタンダード石油會社  
 仙臺工場油槽並諸管裝置 一 式 ライディングサン石油會社  
 混 酸 槽 二 基 海軍火藥廠  
 亞 鉛 釜 五 個 川崎亞鉛鍍金株式會社  
 沼尾川取付工事鐵管 四 六 本 關東水力電氣會社  
 瓦斯煙道製作並取付工事 一 式 旭硝子株式會社  
 無線電信鐵塔 五 基 燈臺局  
 四輪ボギー電動客車 二 輛 鶴見臨港鐵道會社  
 二十噸積タンク車 六 輛 紐育スタンダード石油會社  
 二十五噸鑛石運搬車 二 〇 輛 淺野セメント株式會社

昭和六年

一萬噸フローチングルーフ付油槽 一 基 紐育スタンダード石油會社

靜岡工場油槽並諸管裝置 一 式 ライディングサン石油會社  
 解體二、二〇〇ガロン耐壓油槽 二 基 紐育スタンダード石油會社  
 三十七噸橫置式油槽 三 基 同  
 コンバウンディングタンク(基礎共) 一 基 同  
 端 舟 鈎 二 組 橫須賀海軍建築部  
 錨定錨(女錨ターンプックル共) 三 一 九 組 千葉縣銚子漁港修築事務所  
 鋼 製 掩 蓋 一 組 陸軍築城部橫須賀支部  
 一、一〇〇耗鋼鐵水道直管 一 四 〇 〇 本 橫濱市  
 軍艦金剛用煙突 一 基 橫須賀海軍工廠  
 海上用排泄鐵管 二 五 本 東京灣埋立株式會社  
 三十噸積四輪ボギー重油タンク車 八 輛 ライディングサン石油會社  
 三十六噸橫置式油槽 一 基 紐育スタンダード石油會社  
 一、〇六八耗鋼鐵直管四十七本外八點 七 六 本 東京市水道局  
 罐蒸汽ドラム及水ドラム 一 組 鎮海要港部  
 二十米無線電信鐵塔 二 基 燈臺局  
 陸上排泥管 一 五 〇 本 橫濱市土木局







冷却機胴體製作  
 マンガン鑄鋼製作  
 陸上用排泄管  
 B號金物製作  
 浮標製作  
 第十一番艦艇甲板加工組立  
 鋼管製作  
 桶形鋼板  
 ライニングプレート  
 麥酒貯藏槽  
 ギヤーケイシング  
 セメント用ミル胴體  
 回轉窯胴體  
 セメント用冷却機  
 野外起重機  
 A型臺付水槽

三 基  
 一 式  
 二 〇 〇 本  
 一 〇 〇 組  
 八 五 〇 組  
 一 式  
 二 七 五 本  
 一 四 七 枚  
 一 〇 〇 塊  
 五 九 個  
 六 組  
 五 基  
 一 〇 基  
 一 基  
 一 基  
 一 式

同  
 エフ・エル・スミス商會  
 港灣工業株式會社  
 横須賀海軍工廠  
 舞鶴要港部工作部  
 横須賀海軍工廠  
 富士電機株式會社  
 内務省横濱土木出張所  
 エフ・エル・スミス商會  
 壽屋横濱麥酒工場  
 エフ・エル・スミス商會  
 同  
 同  
 同  
 淺野小倉製鋼所  
 淺野セメント株式會社

昭和九年

セメント用乾燥機  
 石炭乾燥機  
 セメント用ミル製作  
 ギヤーケイス  
 回轉窯  
 冷却機  
 鋼製掩蓋  
 第十一番艦第二一五回註文工事  
 陸上排泄管  
 回轉窯現場組立鉸鍊  
 彈性防舷裝置  
 A號金物製作  
 水道用鋼鐵管  
 造塊工場擴張鐵骨工事  
 清水港上屋鐵骨工事

三 基  
 二 基  
 一 五 基  
 一 一 五 基  
 一 一 組  
 一 一 組  
 三 一 基  
 三 一 基  
 三 一 基  
 四 組  
 二 基  
 二 〇 〇 本  
 一 式  
 五 組  
 三 基  
 三 基  
 一 一 組  
 一 一 組  
 一 一 式  
 一 式

大同セメント株式會社  
 淺野セメント株式會社  
 エフ・エル・スミス商會  
 同  
 同  
 同  
 陸軍築城部本部  
 横須賀海軍工廠  
 港灣工業株式會社  
 淺野セメント株式會社  
 内務省横濱土木出張所  
 横須賀海軍工廠  
 川崎市  
 淺野小倉製鋼所  
 靜岡縣



レール製作	三	個	日本鋼機商工株式會社
一〇越ステックレッグクレーン	二	臺	淺野小倉製鋼所
浮標	七八	個	舞鶴要港部工作部
鋼板製金物	五六	個	同
第十番艦廠外部分工事	五	件	横須賀海軍工廠
第九番艦廠外部分工事	四	件	同
ユニダンミル	三	基	エフ・エル・スミス商會
ダムリング	二	組	同
スライドニューベアリング	三	組	同
ステーションナリトランスポーター	二	組	同
シメトロギヤケース	一	組	同
ガーダー類	一	組	同
マンガン鑄鋼品	一	式	同
一萬五千越鋼製重油槽	六	基	小倉石油株式會社
排泥管	五〇	本	東京灣埋立株式會社
同	一五六	本	東京灣埋立株式會社

回轉窯	一	基	ハルビンセメント株式會社
過熱器	二	臺	日本セメント株式會社
第十七番艦廠外部分工事	一	式	横須賀海軍工廠
二五越積貨車	五	輛	淺野小倉製鋼所
二〇越積無蓋貨車	七	輛	製鐵部
一二越積箱貨車	三	輛	同
二〇越積無蓋平貨車	七	輛	同
二〇越積揮發油タンク貨車	六	輛	スタンダードヴァキューム石油會社

昭和十年

砂金船用スクリーン	二	組	順安砂金株式會社
水道用鋼鐵管	五〇	本	川崎市
第十七、十八番艦廠外部分工事	八	件	横須賀海軍工廠
一萬五千越鋼製重油槽	五	基	小倉石油株式會社
九十越レール起重機	一	基	製鐵部
熱風爐	三	基	同
エツデムアー横型水管式汽罐	三	基	同



五十種レードル	一	基	同
八種天井起重機	二	基	同
熔鑛爐シャフトマンテル	一	基	同
六十種レードル	二	基	日本鋼機商工株式會社
熱風爐	三	基	同
三五種熔銑鍋及同臺車	八	輛	同
高滓取鍋及同臺車	六	輛	同
清水港八千噸岸壁舖裝工事	一	式	靜岡縣
排泥管	六〇	本	東京市
同	七六〇	本	東京灣埋立株式會社
池田式汽罐	一	基	池田工業事務所
回轉窯	一	基	イリス商會
冷却機	一	基	同
ミル	三	組	エフ・エル・スミス商會
スライドシュューベアリング	三	組	同
スクーピングダイヴァイス及びリフター	三	組	同
レーメトロギヤケース	三	組	同
マンガン鑄鋼品	三	組	同
水道用鋼鐵管	五九五	本	東市
名古屋驛鐵骨製作工事	一、四五〇	種	三菱重工業株式會社
タンク並濾過器	二〇	個	淺野カトリット部
澤渡發電所水壓並餘水路鐵管	一	式	梓川電力株式會社
油槽	四	個	矢作水力株式會社
浮標	二八〇	個	舞鶴要港部工作部
ガス、スルースバルブ	九六	個	イリス商會
タンク類	一	式	同
同	一	式	同
攪拌槽	一	個	日本電工株式會社
エツヂムアボイラー	一	基	日東セメント株式會社
罐室油冷却器	二五	個	海軍省經理局
補助罐及同關聯裝置	一	式	同
ドイツバーバケツト	一	個	銚子漁港修築事務所

五十種レードル	一	基	同
八種天井起重機	二	基	同
熔鑛爐シャフトマンテル	一	基	同
六十種レードル	二	基	日本鋼機商工株式會社
熱風爐	三	基	同
三五種熔銑鍋及同臺車	八	輛	同
高滓取鍋及同臺車	六	輛	同
清水港八千噸岸壁舖裝工事	一	式	靜岡縣
排泥管	六〇	本	東京市
同	七六〇	本	東京灣埋立株式會社
池田式汽罐	一	基	池田工業事務所
回轉窯	一	基	イリス商會
冷却機	一	基	同
ミル	三	組	エフ・エル・スミス商會
スライドシュューベアリング	三	組	同
スクーピングダイヴァイス及びリフター	三	組	同



丁 銑鐵鋼塊鋼板

(イ) 銑鐵製造高

昭和二年  
昭和三年  
昭和四年  
昭和五年  
昭和六年  
昭和七年  
昭和八年  
昭和九年  
昭和一〇年 上期

(一ヶ年出銑高・越)

二二、一六四  
五四、八八九  
六二、五〇五  
五八、〇三六  
六一、三九〇  
六四、三七三  
六七、六七二  
四〇、三〇五  
一二、九五八

(六月六日第一熔鑪吹立)

(ロ) 鋼塊製造高

昭和二年  
昭和三年  
昭和四年

(一ヶ年出鋼高・越)

六、七四八  
五三、六六四  
六一、九四六

(十月一日第一平爐初湯)

(三月十六日第二平爐初湯)

(ハ) 鋼板製造高

昭和五年  
昭和六年  
昭和七年  
昭和八年  
昭和九年  
昭和十年 上期

(一ヶ年壓延高・越)

六五、八四九  
六三、六九九  
七九、五三五  
一〇二、五四六  
一三三、二〇六  
七〇、六五〇

(十月廿一日第三平爐初湯)

(四月十二日第四平爐初湯)

大正七年  
大正八年  
大正九年  
大正十年  
大正十一年  
大正十二年  
大正十三年  
大正十四年  
大正十五年

軟鋼板  
軟鋼板  
同  
軟鋼板及高張力鋼板  
軟鋼板及高張力鋼板  
軟鋼板  
同  
同  
同

四、〇〇〇  
二五、一一五  
八、三〇九  
一一、一二〇  
一三、三一五  
八、四八〇  
一一、八五九  
二〇、五八四  
三二、三二九



大正十五年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年上期
一般渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船	入渠修理船
一三八三隻	六八隻	九四隻	七六隻	五九隻	三五隻	三八隻	二九隻	八五隻	四九隻

戊 修 理 船 舶

昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年上期
同	同	同	同	同	同	同	同	同
四二、九二四	五二、六一六	六四、三七九	六四、六二〇	六九、七〇九	八二、三六八	一〇九、九八八	一三八、七三三	七〇、七八一
一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船	一般渠修理船
二九隻	一〇隻	六五隻	六七隻	七八隻	八八隻	八八隻	八八隻	八八隻



## 第八章 雜 錄

川崎鶴見間海岸百五十萬坪埋立地は故淺野社長が遺した一大工業地帯であり、此處には硝子・造船・製鐵・鑄造・電機・機械・石油・製粉・鋼管等々の諸工場が軒を連ねて日々巨額の生産品を産出しつつある。北に大東京を擁し南に大横濱港を控へ海陸運輸の便は製品の生産原價を低廉にし物資集散の利便は需給販賣を容易ならしめ眞に理想的工業地域として永く後世に捧げられたものである。

且又此の地帯は大都會に隣接し幾百萬市民及内外旅客に接觸する故に不識裡に工業知識を培養刺戟する事深く當地方に於ける工業發展以來其の教育方面に幾何の貢獻をなせるや蓋し計り難いものであらうと信せられる。實際當社の例に於ても造船製鐵に關する通念を普及しつゝある事を自覺して居る。中にも畏多き事ではあるが高貴の方々をさへ屢々工場に迎へ奉り普く此の方面に興味を有せられるに至つた事を深く光榮と感じて居る。

大正九年五月海軍大將に在はしました東伏見宮依仁親王殿下には當社御巡覽を仰出された。殿下は

軍需工業能力に對し深き關心を持たせられ特に當社御台臨を思ひ立たれた由に拜承する。別當川島令次郎氏御附武官花房太郎大佐事務官高橋暉氏等を従へさせられ同月二十一日御來場の報に接した我社長は重役全部と共に恭しく俱樂部に迎へ奉り、賜謁の後福田副社長御先導で限なく工場を御巡覽後翌日進水すべき第二十四番船みらん丸船尾部で一同と共に記念撮影を差許された。

又昭和八年七月六日には東久邇宮稔彦王殿下を我工場に迎へ奉る光榮に浴した。當日は清浦伯爵が御供して白石日本鋼管會社副社長が先導し奉り工場全部を御巡覽あり、特に製銑製鋼製鋁作業に御興味を持たせられた様に拜察された。今回も熔鑄爐附近で記念撮影を差許されたのであつた。

此の外學習院生徒として御見學遊ばされた稚き宮様達をも多く迎へ奉つた。

斯く高貴の方々を初め奉り男女青少年團、修養團、學術諸協會、學生生徒、在郷軍人團、現役海陸軍人團體等々の人々をも普ねく我工場見學者として迎へ得る事は眞に當所の欣幸とする所である。

當社の造船・製鐵・船渠三部は各々時代を異にして創設せられたが奇縁とも稱す可きは孰れも陽春四月に業務を開始して居る事で眞に一興と考へられる。

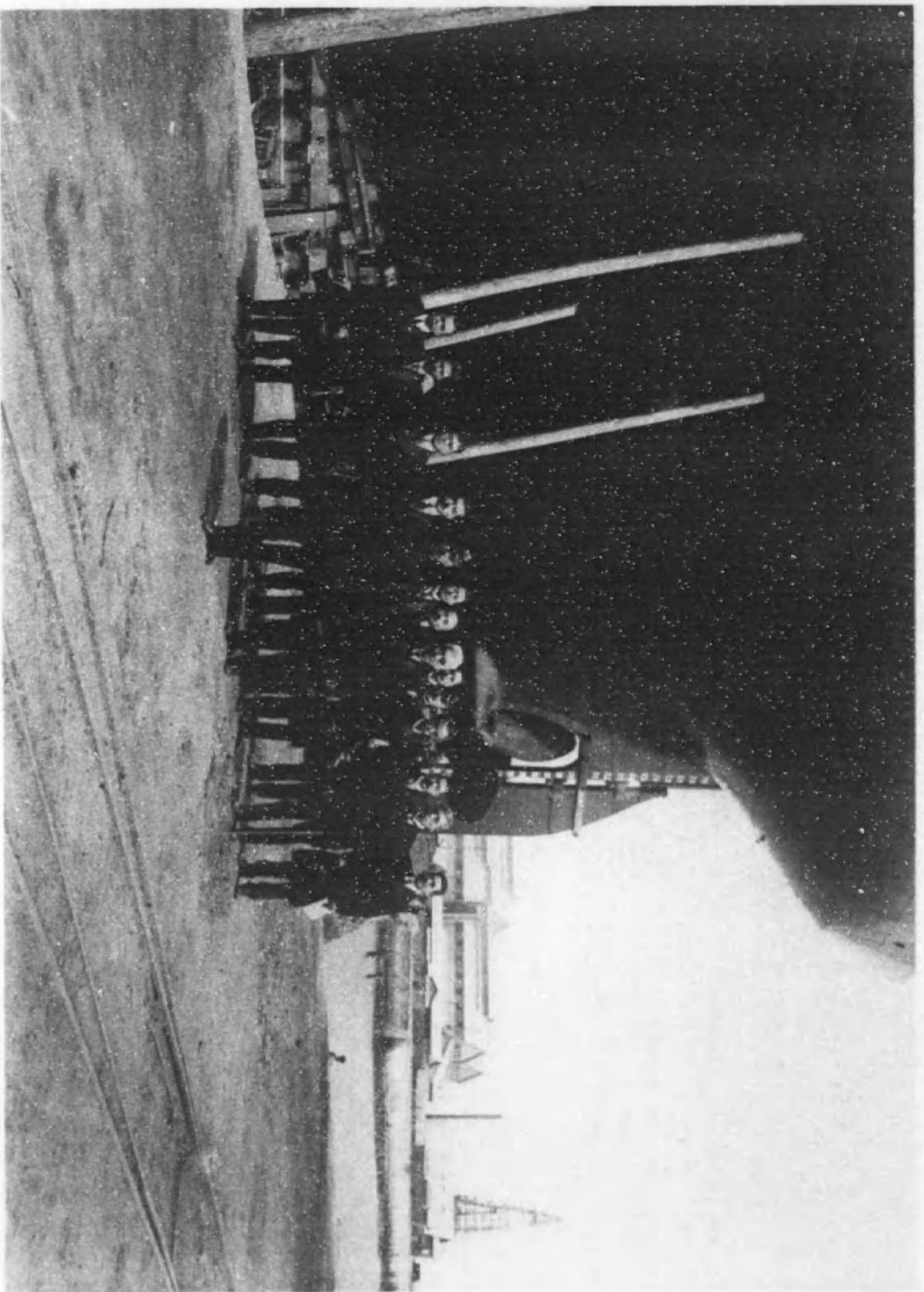


淺野造船所開場式	同	六年四月七日
淺野製鐵所創立	同	七年四月六日
船渠開渠命令	同	十二年四月十三日

當社は淺野家の經營に係る故大正五年四月創立以來昭和五年十一月永眠の日迄先代淺野總一郎氏は代表取締役社長として名實共に親ら陣頭に起つて經營された。次いで社長となつた淺野泰治郎氏は初め大正六年以來昭和五年迄は監査役として就任し先代易實後代表取締役社長に就任し、淺野總一郎を襲名の上今日に及んで居る。又鈴木紋次郎氏は創立時代より今日迄連續して業務を統率し、或は部長理事又は監事の職務に當り、或は常務取締役役に任じたが、昭和六年以來專務取締役として現時に及んでゐる。

淺野家一門にして以上の外實務に携つた人々には取締役として淺野良三氏、同八郎氏がある。淺野良三氏は創立以前より大小樞機に參劃し後監事又は常務として實務を執りたる事もあり今日まで連續取締役に就任し、又淺野八郎氏は秘書役部長等の職務を執り、大正八年以來取締役に就任し一時常務となつた事もあつた。



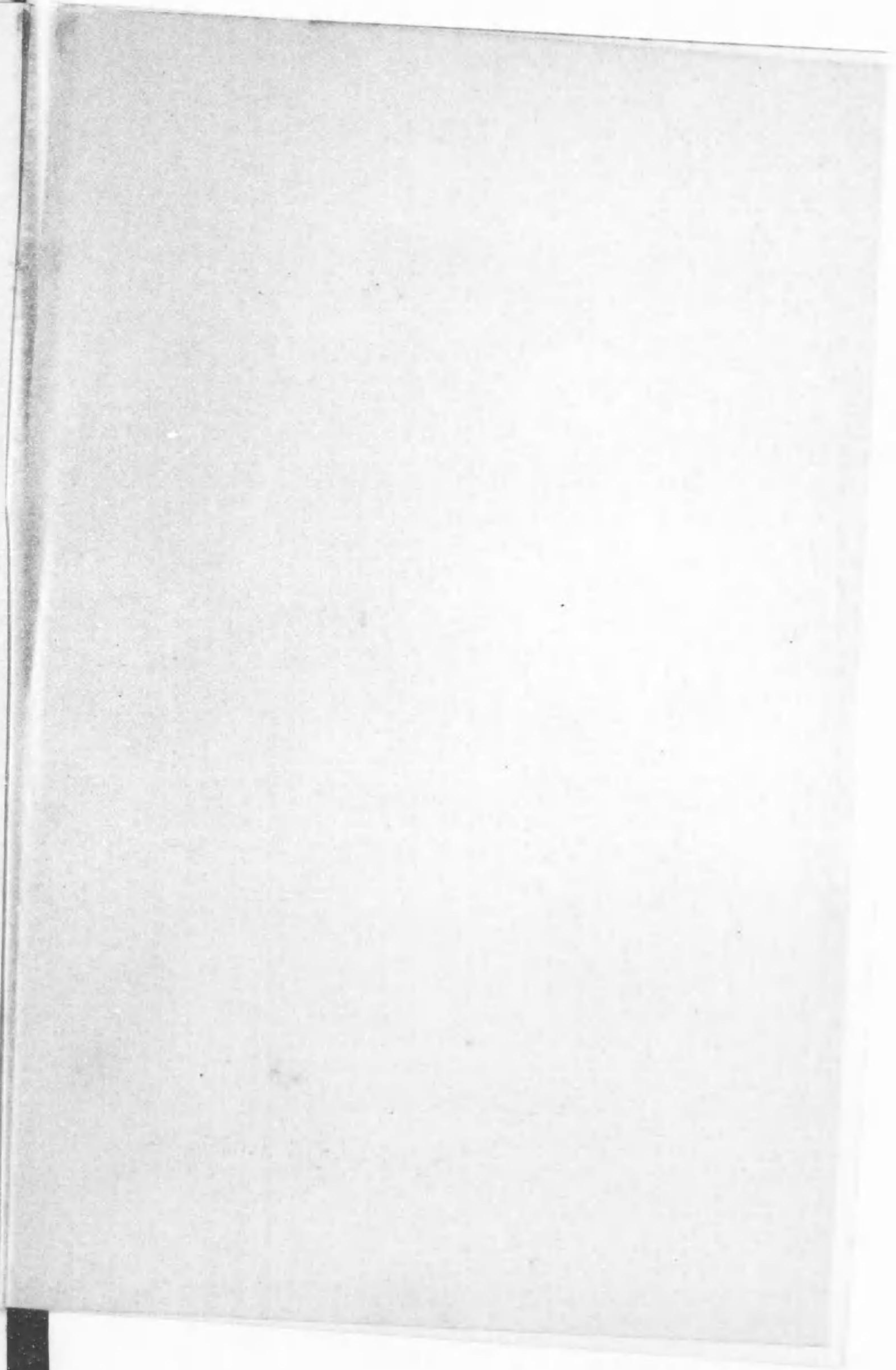


東伏見宮依仁親王殿下台座記念

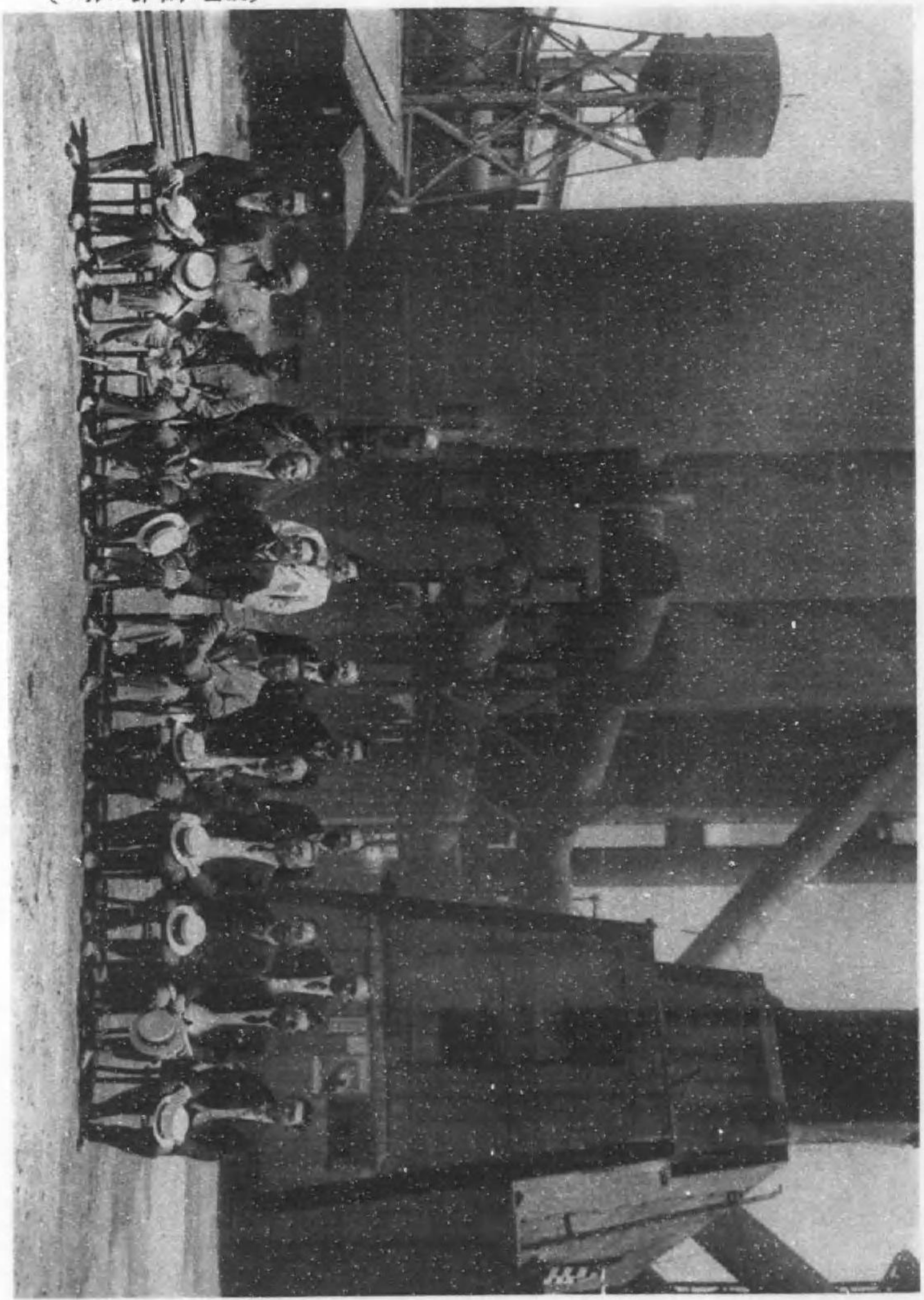
第三十八圖

(大正九年五月二十一日)





第三十九圖



東久邇宮檢修王殿下台階記念

(昭和八年七月六日)



淺野造船所 重役就任及辞任

取締役就任及辞任		大正五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	昭和二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年
代表取締役	社長																				
淺野總一郎	社長																				
淺野泰治郎	社長																				
鈴木敏次郎	常務																				
加藤良																					
原正幹																					
前川益以																					
橋本梅太郎																					
白石元治郎																					
淺野良三	常務																				
福田馬之助	副社長																				
淺野八郎	常務																				
安藤作太郎																					
陰山金四郎	常務																				
小野暢三																					
横山徳次郎	常務																				
三橋篤敬																					
大兼要	常務																				
小松隆	常務																				
金子喜代太	常務																				
正木壽郎	常務																				
大村正篤																					
清宮岳壽																					
齊藤順三																					
黒田琢磨																					

監査役就任及辞任		大正五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	昭和二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年
大洞正次郎																					
古田良三																					
淺野泰治郎																					
金子喜代太																					
淺野義夫																					
橋本梅太郎																					
棉貫吉秋																					

第四十圖



其の他一族一門にて取締役又は監査役に就任した人々には浅野義夫氏、白石元治郎氏、金子喜代太氏等がある。

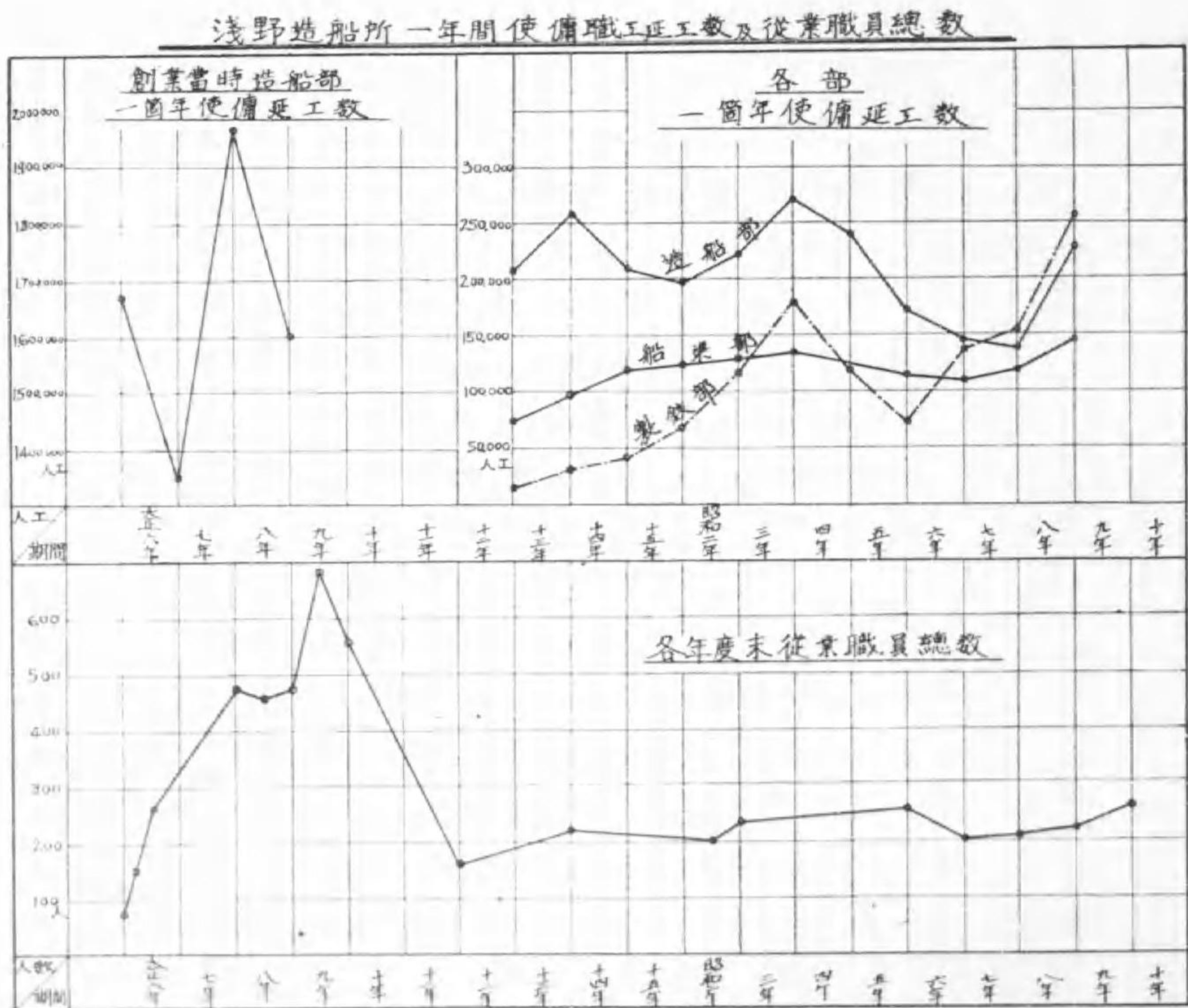
加藤良氏、原正幹氏は創業當時技術部長又は営業部長として建設経営に従事し、加藤氏は大正五年より七年迄取締役として就任し、原氏は大正五年より七年まで取締役であつたが後に相談役となり或は再び取締役に就任した。其の他取締役として實務を執つた人々には副社長福田馬之助氏、造船部長安藤作太郎氏、造船設計部長小野暢三氏、総務部長又は常務たりし陰山金四郎氏あり、又舊浅野製鐵所常務取締役横山徳次郎氏は同社合併後當社常務取締役として在任した。造機部長たりし三橋篤敬氏、囑托たりし末兼要氏及び同じく囑托たりし小松隆氏、船渠部長たりし正木壽郎氏、製鐵部大村正篤氏等は時代こそ異なれ各常務取締役として嘗て經營に任じ又は現任中である。

其の他取締役諸氏にして既に辭任したる前川益次氏、橋本梅太郎氏の外現任中の清宮岳壽氏、黒田琢磨氏、齊藤順三氏がある。

監査役諸氏には橋本梅太郎氏が連続就任中である外辭任せる大洞正次郎氏、物故せる古田良三氏、棉貫吉秋氏があつた。

此等役員諸氏の任期に關しては第四十圖にて説明するを便とし此處には省略した。





第四十一圖

当社創立以前より故社長の最高顧問たりし大學教授工學博士故寺野精一氏は明治廿八年以來海運及造船方面に關し故社長の諮問に應じ、特に當社の建設時代にありては技術者の統率及人事關係に於て功績のあつた人であつた。大正七年顧問を辭し同十二年逝去を見たのは遺憾である。

又工學博士渡邊讓氏、同男爵斯波忠三郎氏には建築及造船關係で各々顧問を囑托したが今は故人となつた。山田真吉氏は船渠關係で又大學教授山内不二雄氏は造船關係で相談役となつたが孰れも解囑した。其の他業務の伸展に連れて顧問及囑托として専門有爲の人々に援助を乞うて居る。

當社職制は創立當時の部課係制度より理事課長制となり或は部係制と更められ従業員數も大正六年二百六十名位より同九年淺野製鐵所合併當時は六百七十名となり、大正十一年整理後は百六十名位となり今日は再び二百七十名を有して居る。經營二十年間業務の繁閑により職員總數は時々増減したが此れは第四十一圖に譲り此處には再説を略する。今日勤續十五年以上に及ぶ社員數は全員の約六%に止まるが此等の人々に負ふ處蓋し大と謂はねばならぬ。昭和五年七月には専務取締役及支配人を選任する事となり初代支配人には市原伊三郎氏次いで賀田秀一氏が任せられ今日に至つて居る。

在籍職工數は大正八年の約五千六百名を最高とし大型船建造殷盛なりし頃は常に三千名以上であつ



たが其の後鐵工工事及製鐵部の發展と共に其の性質上多數職工を要せざる事となり今日では約二千二百名に止まつて居る。之を毎年一ヶ年の使傭延工數で見ると大正八年の百九十六萬五千人工から昭和九年の六十三萬人工になつた譯である。此等使傭延工數の推移に關しては從業職員總數と共に圖表するを至便と考へ第四十一圖に之を示した。

當社定時就業時間は創立當時は一日十時間を一人工と定め、後一日八時間を以て一人工とし、現今は九時間を九給とし之を一人工と定めてある。即ち之を年代別にすると左の如くである。

大正五年創業より大正八年九月まで 十時間を一人工とす

大正八年十月より同十年三月まで 八時間 同上

大正十年三月より現在に至る 九時間 同上

(但し製鐵關係者は十一時間半とす)

當社創立以來日淺く又大正十一年度に職工大整理を行つた結果として多年勤續の職工數は餘り多くないが、十年以上勤續者は造船部に於て二七%、製鉄部で二二%を占めて居る故過少と稱するものも當らない。

猶又職工兵役關係に就いて見るに大正八年及九年度に於て職工全數の約一八%が海陸軍々籍にあつ



たけれども昭和九年度にては三三%となつて居る。此の關係は近年職工採用試験合格者に兵役關係者多く且又採用後も成績良好である事を語るものである。職工年齢に就いて觀察するに大正九年度に於ては二十五歳乃至三十五歳の職工最も多數で全員の四七%を占めて居たが、昭和九年度調査に據ると一般に年齢が低下して造船部にては二十歳乃至三十五歳年齢者四十三%、製鐵部にて同年齡者六十二%となつて居る。

近年工場事故防止設備及其の豫防宣傳により職工負傷率は甚だ減少して來た事を認める。大正七・八・九年の統計に據るに當社全造船所員負傷者數は一ヶ月平均千人に付き十六人餘であつたが昭和五年乃至九年度五ヶ年平均は二・五人となつた。尤も昭和年度になつて造船部の工作種別は趣を異にし構桁工事類を交へた故に此等負傷率の減少を見るに至つたのではあるが、一般に事故防止の施設と注意力が普遍的になつた結果と認められる。

當社建設當時は工場附近の潮田生麥地方に數千名の應募職工を居住せしめるに困却し、會社直營及借入舎宅を準備して一時の混雜を緩和した。此等村落は爾來急激なる膨脹を見て立派な工場街とはなつたが創立當時は土著者と移住者との間に融和せざる感情も潜在して居た。此の舎宅制度は大正六年から十年迄の間實施せられ職工は四割乃至五割に近い家賃補給額を支給せられて相當の住宅を得、借

入舎宅主は當社保證の下に舎宅を安全に提供する事が出來た。而して此の爲め當社は一ヶ年六萬圓乃至七萬圓の舎宅費を支出して居た。

又工場用清水及職工舎宅飲料水に關しては建設當時第一に直面當惑した問題であつた。而して水船によりて横濱方面より供給を受け或はタンク馬車等により住宅に給水をしたのであつた。大正六年町田村市場に鑿井を試みて成効し、七年四月から水道を自營して附近住民にも給水し、昭和四年橋樹水道會社に讓渡せられる迄は繼續した。

職工兒童小學教育に關しては創立當時は別に自ら校舍を設けねばならぬ状況であつたが、幸に町村當事者との協定が出來て其れには及ばずに濟んだ。

大正八年及九年度には米價が奔騰して庶民生活に脅威を加へ、終に彼の有名な米騒動の如き不祥事の勃發迄も見た事は近代の恥辱であつた。當社は斯る時勢に際し白米廉賣日用品配給制度を定め雇員及職工一般に對して奉仕を試みた。此の爲め當社救濟米損金は大正八年度四十七萬圓餘、九年度二十九萬圓を計上したのであつた。

職工の醫療に關する施設は工場内治療室より初め、後之を場外に公開して一般民衆への診療にも應じた。即ち大正八年鶴見に病院を設立し一日平均三百人の患者を治療し、當所職工及家族の藥價は普



通代價の半額を徴した。此の設備も昭和二年迄繼續せられたが今日では其の必要を認めざるに至り閉鎖せられた。

昭和十年十二月十日印刷  
昭和十年十二月十七日發行  
〔非賣品〕

著者 原 正 幹

發行者 株式会社 淺野造船所  
代表者 淺野總一郎

印刷者 宮本印刷所  
綾部喜久二

横浜市鶴見區末廣町二丁目一番地  
東京市神田區小川町二丁目十二番地



終